

つた。これらの用語のいかにも重く
固い語感に象徴されるようななにか

ではなく、親がわが子と生をともに
してゆくことをもつとさりげなく支
える道はないのだろうか。

また、本書にあるバックの娘を運
れるの旅程は、深い水の底をただひ
とり歩むがごとき孤独に充たされて
いる。たとえば、本書には父親(夫
の影がいつさいみえない。ほかの家

村瀬 学善

『理解のおくれの本質—子ども論と宇宙論の間』

族もまったく登場しない。これはど
うしたわけだろうか。

これらの事柄は、純粹の愛と思
いを注ぐ母親バックの目にわが子が成
長しない存在にとらえられることに
なったのと無関係ではない気がする。

滝川一廣

通俗的に理解のおくれは、いわゆ

る「知恵遅れ」「知的障害」として
捉えられ、理解のおくれのない人た
ちとは違って、なんらかの障害が基
盤にあると考えがちである。

本書は、そのような理解のおくれ
の原因について言及したものではな
く、理解するという精神的な営み
は、「おくれ」を本質的にもつてい
ることを論じた哲学的な思索の書で
ある。

をもたない人たちにとっては他人事
のように思えるかもしれないが、著
者は「私たちすべてにかかわる問題
をはらんでいる。それをみつめる視
座がまだ創り出されていない」ゆえ
に、「思想としての理解のおくれ」
を本書で問おうとした。

これまで統合失調症や躁うつ病に
ついては、著名な学者たちの哲学的
な思索を通して、精神的に探求され
てきた。しかし、なぜか「理解のお
くれ」について関心が注がれること

は少なく、その意味でも本書はきわ
めて貴重なものである。

動物は世界に対していかなる行動
をとればよいか、多くの場合それを
本能的に知っている。このように動
物はみずからの属している事柄に対
してすでに多くのことを知っていな
ければならない。このような体験の
と称し、それは世界に対して先取り
しつづ常に「同時的」であるとい
う。

人間がこのような宿命を背負った
存在であるために、「属の体験」と
「範の体験」とのあいだで行きま
することが難しくなっている。「範
の体験」は世界が人工的に切り取ら
れた知識の世界であるがために、日
常生活世界から遊離していくという危
険性を常にはらんでいる。そこに人
間存在の危うさが潜んでいる。

しかし、「範としての見方」によ
つてわれわれは身の回りにある無数
の対象に対して、これは○である
という時、周りにいる者も同様に○

で「同じもの」だとみなしてい
る。みんなが決めることによつて成
立した「同一性」である。「範の世
界」とはこのようにして取り決めら
れた同一性によつて支えられてい
る。その結果、われわれ個人の心は
安定し、集団生活も円滑に送ること
ができてくる。

「範の世界」を容易に体験できに
くい人々はどのようにして心の安定
を求めているのであろうか。著者は
自閉症の子どもや脳障害患者にみら
れる症状(といわれてきた特徴)を
具体的に取り上げながら、それは病
理的(われわれ健常者とは異なつた

ような理解のあり方を著者は「範の
世界体験」と呼ぶ。範の世界は人工
的(歴史的)に秩序づけられた世界
であるがゆえに、われわれはそれを
あとから理解しなければならぬ。
人間が世界を理解するという営み
は、本質的におくれることを含んで
いるのはそのためだという。

異常なもの)ではなく、彼らの生き方の特徴が如実に反映しているのだと主張する。

自閉症児にみられる同一性の保持。精神医学の世界で中核的症狀とされてきたものである。われわれは「範の世界」でどうにか同一性を保つことができているが、彼ら「範の世界」で生きづらい人々がなんとか安定を見出そうとする彼らなりの試みが同一性保持だとみなす。

さらに印象的な例として、ゴルドシュタインが報告した前頭葉疾患の婦人を取り上げている。四角形を四個つなげた図形を示し、これは何かと尋ねた。彼女は窓だと答えた。このように提示された手本を身の回りの具体的なものと認めた時にはその図形を模写できるが、そうでないときには模写できなかつたという。著者は彼女が示した行動特徴は、対象を具体的関心、実践的関心に強く

引き寄せて捉えているからではないかと問う。われわれは容易に切り取ってこれは四角形であると見なしているが、彼女では対象を捉える際に、その背後に付いているものを含み込んでいるというわけである。ここにも「属の世界体験」の特徴をみてとることができる。

この例を読んで評者はすぐにある青年期の自閉症者を思い起こした。彼は施設内でもひときわこだわり行動が目立っていたが、生活を共にしている職員が彼のこだわり行動を見ていて、ある興味深いことに気づいたのである。ドアを誰かが開けてそのままにしていると、彼は単にドアを元通りに閉めようとするだけでなく、そのドアを開けた人を連れ戻してその人に閉めるように要求するのであつた。またある日の入浴後、食堂でコンサートが開かれた。そこで職員がおやつを配っていた。その時彼はそのおやつをどうしても受け取ることができなかつた。しかし、たまたま床に落ちたおやつを見つけると、それを拾って食べていたというのである。彼が対象世界を捉える際に、いかに対象のみを切り取ること

が難しく、対象の背後に付いて離れないものを含み込んで捉えているかがよくわかるエピソードである。

「範」は歴史的に形成されることによつて、その本質は多義的であるにもかかわらず、後世のそれぞれの共同体が、そのつどその「範」を一義的な内容に決め直してきたので、その共同体に属する以上われわれは「範」をつねに一義的な内容において受け止めうるものと感じてきたのである。このように「範の体験」とは、多義性を一義性として体験する、その二重の体験であるということである。このような二重の体験は、われわれには通常意識化されにくい。自閉症の子どもとのコミュニケーションの問題を捉え直してみると、随所にこの問題が本質的に絡んでいることに気づかされる。子どもたちの体験世界は多義的で、ひとつひとつの体験が独自の意味性を帯びて輝いている。われわれには何の麥哲もない単純な繰り返しにしか映らないような世界が、彼らの世界では多義的なものとして体験されている。

ここで重要なことは、われわれが

先に述べた二重の体験をいかに自由に「行きき」できるかということである。「範の世界体験」に身を置くことによつて、両者を「行きき」することが困難になり、「息」することさえも難しくなっている。そんな危機意識を著者は繰り返し強調している。

子どもや病者のこころの世界をわれわれのこころの世界との繋がりで見え直すことによつて、われわれ自身のこころの世界の危うさを再発見するとともに、彼らとのこころの繋がり糸口を見出すこともできる。そんな可能性を強く印象づけてくれる名著である。

著者が三〇代前半という若き時代に纏めた書である。本書の隅々にわたって著者の熱き想いが感じられ、心が動かされる。発行されて早や二〇年以上を経過した。しかし、本書の輝きは一向に失われていない。すでに絶版となり、入手困難となっている。再版を期待するのは評者のみであろうか。

小林隆児

